

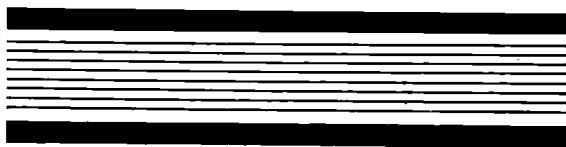
日本文学全集
36

椎名麟三・梅崎春生
武田泰淳

美しい女・深夜の酒宴・神の道化師
幻化・桜島・風宴・突堤にて・記憶
「愛」のかたち・蜷のすえ・異形の者・他

河出書房

椎名麟三・梅崎春生・武田泰淳



カラー版日本文学全集 36

1969©

昭和四十四年十二月二十日 初版印刷
昭和四十四年十二月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者

椎名麟三 梅崎春生 武田泰淳

発行者

中島隆之

印刷者

草刈龍平

装幀者

亀倉雄策

本文印刷

中央精版印刷株式会社

口絵印刷

凸版印刷株式会社

製本

加藤製本株式会社

製函

加藤製函印刷株式会社

本文用紙

本州製紙株式会社

クロース

日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331136-0961

目次

椎名麟三

美しい女……………セ

深夜の酒宴……………九

神の道化師……………三

梅崎春生

幻化……………一七

桜島……………三〇

風 宴 二二八

突堤にて 二四五

記 憶 二五〇

武 田 泰 淳

「愛」のかたち 二六一

蝮のすえ 二二

異形の者 二四三

物言う鼠 二六三

注
积

年譜

解
說

卷頭口絵

色刷插画

美し
い
女

深夜の酒宴
神の道化師

神の道化師

幻化
風宴
桜島

風宴

「愛」のかたち
娘のすえ
異形の者

異形の者

異形の者

紅野敏郎 三六五

保昌正夫 三

古林尚三〇

小田切秀雄 三九七

神原和夫

野見山曉治

脇田和

上野泰郎

椎
名
麟
三

美しい女

第一章

1

私は、関西の私鉄に働いている名もない労働者である。十九のとき、この私鉄へ入って以来、三十年近くつとめて、今年はもう四十七になる。いまの私の希望は、情ないことながら、この会社を停年になつてやめさせられると同時に死ぬことだ。もちろん、会社が停年まで、私をおいてくれるならばだが。私がこんな希望を抱くのは、会社をやめて行った同僚のほとんどが、妙なことに悲惨な生活をおくっており、なかには癡狂したり、自殺したり、病死したりしたものもいるからだ。口惜しいことだが、交通労働者というものは、どこへもって行っても、あまり潰しが利かないらしいのである。

過去をふりかえって考えて見ると、私は、いろんな人々から、いろんな風に云われながら生涯を送つて来た。ある時期は、左翼的な人々から、無自覚な労働者だとか、奴隸根性をしているとか、臆病だとか、卑怯だとか、といわれた。またある時期は、右翼的な人々から、無関心だとか暖昧だとか無責任だとかいわれた。現在では、組合の意識的な人々からは保守的だといわれている。私は、このようなレッテルについて一言も弁解しない。むしろ、我ながら情ない企てだと思ふ

のだが、人々から与えられたこれらのレッテルへ、人なみの熱い血を通わせ、生命の光をあたえてやりたいと思うのである。

このような私の喜劇的な位置というものは、私の誕生のときから定まっていたようだった。

私の父は、関西の小さな町で、小間物の行商をしていたが、そのころ胃痛で、寝たり起きたりしていた。年も六十を過ぎていて、誰ももう駄目だと思っていた。父は、村長の家の小作をしていた祖父が賭博で刑務所へ入ってから、故郷の村にいらなくなつて、村の醬油つくりの家の下男をやめ、その村から鉄道の駅で五つはなれているこのK町に來たのだが、それから三十年あまり、町役場の小使をしていたかと思うと、かもじをつくりはじめ、それも駄目だとなると、魚屋をはじめていたが、五十すぎから、かもじを入れていたころの花街のわずかな得意を頼つて、小間物の行商人になつていった。彼が、そのころ引張つて歩いた車が、父の死後も長い間、家の裏の納屋に放り込んであった。売れなかつたからである。それは黒漆を塗つた、ちよつと棺に似た箱へ、自転車の車輪を二つつけ、人力車のような轆をつけたもので、どことなく間に合わせの感じのする粗雑な車だった。もちろん父が自分でつくつたものだ。私は、小さいとき、その車を、「葬式屋」と呼んだ。

母は、父の主人の家へ子守りに來ていたのを、父が故郷を逃げ出すとき、父にうまうまと連れ出されたもので、そのとき数え年で十六だったという。そして母は、そのことをきわめて自然な成行きと考え、後悔もせず、その後の三十年間に、父に始終なぐられながら、七人の子を生み、四人の子をみな一年たない間に死なせていた。そして私をはらんだときは、四十六だった。

兄の敬治は、駅前の運送店につとめていたが、給料は微々たるもので、養種屋の女中をしている上の姉の千代子も、家計の足しにはならず、家の生活は、大部分母が花街の女たちの汚れものを洗つてもらつて来る金に頼っていた。母に、それほど仕事があったのは、一に父の

おかげだった。というのは、花街のおかみや女たちが、彼女らの顔馴染みであった父の、胃癌という病気になる、だからきっぱり死へ定められてしまった人間となったことに同情してくれたからだ。しかし父は、胃癌になってから、一年半あまりも生きていたのである。だから順当ならば、彼女たちは、たとえ飽き飽きしても、一年半あまり同情しつづければならないはずだったのである。

ところが、胃癌の父が、母へ私をはらませてしまったのだ。父や母にとつてだけでなく、同情が売物であった一家にとつては、悪魔が母の腹のなかへ忍び込んだような衝撃だったことが想像される。というのは、母が、町はずれの竹藪のなかに住んでいる巫女のもとへ行つたという事実からも察せられよう。そのとき巫女は、父の先祖に人を殺した者がいて、その霊がたたっているのだから、その霊を祭るように、というけしからぬ託宣をした。その託宣のおかげで、家の小さな仏壇のなかに、氏名不詳と書いた白木の位牌がまつられた。だが、私は、母の腹のなかで、いささか残酷であるが、順調に大きくなつて行つたのである。やがて母は、薬種屋の女中をして私の姉を通じてなんてんの根を手に入れた。その地方では、子供を間引くために、墮胎薬としてなんてんの根を煎用するという、かくれた風習のあることを母に教えるものがあつたからである。母は、危険を覚悟で、なんてんの根をのみつづけた。だが、私は、そのような母の悲壮な医学的処置や父や兄姉たちの狼狽には、全く無関心だった。私は、父の死ぬ一月前に、自然の法則にしたがつて、母の腹から排出されたのである。私の産声は、私の一家に、あわれな驚嘆を与えた。父は、弱果てた身体を、壁に凭らせながら、情ない声で訴えるように姉の千代子へこういった。

「生まれたんや……、生まれたんや……、生まれたんや」

私は、父母や兄弟が、どんなあわれな驚嘆を示しながら、産婆の手のなかにある私を見たか、私は私でその彼らに対してどんなに無邪気に振舞ったかを想像するとき、ユーモアを感じずにはいられないの

だが、私が自分の誕生にこのようにこだわるのは、宿命の原型のようなものを、その自分に感ぜざるを得ないからである。

父の死後、私は、下の姉の数枝の手で育てられた。数枝は、そのころ小学を出たばかりであつたから、私が彼女にとつてどんな重い桎梏であつたか、察することが出来る。だが、また私は、普通の赤ん坊が泣くように泣き、笑うように笑つただけだ、ということも確実である。家族の者たちが、私にどんな意味をあたえていたにせよ、私は実に無邪気だつただけだと断言してはばからない。

私が、小学校へ行くころは、家の生活はかなり安定していた。兄の敬治は、依然として運送店へ住込みのままだつたが、トラックの運転手となり、あの大正初期の好景氣に乗つて、収入も多く、その上、炭や米や肥料などの荷抜きをして売りとばすという、はなはだ香しからぬ余禄も多かった。敬治が、突然トラックをとばして来て、家の前で急停車させると、商家風に出来ている家の表のガラス戸をがらりとあけるのだ。それから助手に向つて叫ぶ。

「何をばやばやしてけつかるんや、はよ下ろせ！」

家の土間へ、炭俵が、三俵も五俵も勢いよく投げ込まれる。母や私たち三人の姉弟は、その兄へ彼が英雄であるかのように協力する。彼はときには、破れて太い指の突き出ている汚れた軍手のまま、ポケットから銀貨をつかみ出して、

「ほら、小づかいや」

と畳の上へ投げ出すと、さつと引き上げて行くのである。兄は、あらゆることに要領のいい男だった。そのころもう三十だったが、女も数人あり、彼女らに対しても要領よく振舞っているようだった。だが、続いて起つた大正のパンニックが、兄の要領のよさにとどめを刺した。彼の長い間つとめていた運送店が潰れ、しばらく失業してから、やっとH市の運送店へ口を見つけて行つたが、その店は窮屈で待遇もひどいものだった。彼は、そこで荒物問屋のひとり娘へ、うぶな少年のような恋をして失恋した。そのころの彼のやつれようは、滑稽なほ

どであつて、母や姉から五十銭の小づかいをせびりとるのに、見えすいた嘘をつく卑屈な男になつていた。

上の姉は、大工と結婚して、一家の支柱は、下の姉の教枝に移つていた。教枝は、カフェーにつとめはじめたからである。このような生活のなかにあつて、私の心に残るのは、母の姿だ。母は働くことしか知らない女だつた。彼女は、全く「こまねずみ」という仇名をつけたいほどくるくる身体を動かした。彼女は、全く絶望というものから無縁だつた。私は、彼女の泣くのを一度も見ただけではない。それは彼女の精神に由来するのではなく、まことに残念ながら、それは彼女の無知のせいだつた。彼女はよく自慢そうに兄のことを語つて、一つ覚えのせりふのように、

「うちの息子、トランクに乗つてまんねん」

と繰り返すのだ。幾度トランクとトラックとのちがいを説明しても、にこにこしながら聞いているだけで無駄だつた。姉たちは、このような母を相談相手にならないときめて、私の身の振り方を決めるときも、母を除外した。だが、母にとってはそんなことは、少しも苦痛ではなかつたのである。彼女は、小柄な女で、六十になつても小学生のように手を大きく振つて、駆けるように歩いた。焼酎が好きで、飲むと愚にもつかぬことを云つて、楽しそうに笑つた。

私は、このような母に、そして母のこのような無知に限りない郷愁を感じる。私は、いま、もう五十に手のとどく中年男になり、頭にも白毛がまじりはじめている。だが、この間いやな事件があつて、それを忘れるために、釣り仲間へ加わつて海釣りに行つたのだが、帰りに酒にまかせて悪所へ泊つた。しかし私の心からは、死の思いが消えず、うとうとしながら思わずこゝろ叫んでいた。

「おかあちゃんー」

傍の女は、はげしい勢いで反射的に身を起すと、強い嫌悪をこめながら吐き出した。

「いややわ、このひとは！ 何もわてと寝てて、おくさんのこと思い

出さんかてえやおまんか！」

だが、私には子供はなく、だから妻を「おかあちゃん」と呼んだこととはないのだ。母は、私がこの私鉄に入る前年、六十四でなくなつていて、それからもう三十年たつてゐるのだが、いまだに、困つたときや不安で眠れないときにとび出して来るのが、恥ずかしいことだが、この情ない「おかあちゃん！」なのである。

私は、いま、運輸課の切符の係だが、私の机の下には、焼酎の一瓶がいつもおいてある。私は仕事中でも、お茶のかわりにその焼酎をのむのだ。係長も運輸課長も、私にはさじを投げた形で、私の焼酎は黙認されている。だが、私は、この黙認にあまえてゐるのではない。仕方のない男として人々から見すてられてゐるのが快いのだ。だが、日本酒でもウィスキーでもなく、焼酎であることは、母の焼酎にがつてゐる気がして、ときには、自分でもその毒になるほど、耐えがたい思いがするのである。

2

私は、全く不名誉な話だが、一度も本当の自分であつたことはない。私は、高等小学を卒業後、そのころ市になつたK町の青年学校へ通ひ、それからこの私鉄に車掌として入つたのだが、車掌として勤務していても、何か自分ではないことをしているという気がするのだった。ことに駅名称呼などで、車内で声高らかに次の駅名を叫んでいるとき、自分が鶏でいまときをつくっているのだ、というような気がするのだった。そしてこの私の精神的な特徴は、そのような意識が私にやつて来たとき、一度は神妙にがっかりするのだが、すぐにがっかりしている自分が、ひどく面白く感じられて来るという奇妙なものだった。

だから私は、思いをつくし意をつくしてしごく真面目に勤務した。そうする方が面白かつたからだ。佐鳥というひどくやせた古参の運転手は、気分屋で、あるときは脱線しないかとひやひやするほど車をと

ばしていたかと思うと、ふいに牛の歩みよりのろのろ走らせるのだった。私が、どうしたのかと思って運転台に行くと、佐鳥は神妙な顔で私にいうのだった。

「どうも故障らしいんや」

もちろん、故障を起しているのは、車ではなく、彼の気分であることはいうまでもない。車掌には、このような運転手は鬼門である。ボールをスタンドさせられたり、突拍子もない早い引き出しをやられて、乗ろうとしてステップに足をかけている客をひっくりかえしそうになるからだ。しかしそのような彼に、誰も文句が云えないのだ。というのは、彼は、二十数年も運転手をやっている古参のひとりだからだ。ある日、この佐鳥と乗り組んだとき、ふいに車掌台へ三点信号が来た。どんな用事かと思って、満員の人々をかきわけてやっと運転台へたどりつくと、彼は、何か納得の行かない顔つきで、なかの古参の私にいうのだった。

「お前、車掌がそんなに面白いのか？」

「面白いというわけやないんやけど」

「お前と乗り組むと、ほんまに何か、いらいらさせられるんや」それから彼は、腹立たしげにどなった。「ええか、とばすぞ！ ポールをちゃんとにぎっとれ！」

だが、私は、佐鳥には迷惑だったろうが、このような彼が好きだったのである。もちろん、佐鳥だけでなく、一緒に働いている仲間できらいな者はいなかった。だが、仲間の方では、残念ながらみんなこのような私に対して好意をもってくれていた、ということは出来なかった。軽蔑し去っているという顔つきをしている者もいたし、詰所で人々の間に、私のことが話題になるときも、人々の表情に多少私に対して呆れているという感情のいりまじっているのを認めることが出来た。

だが、私は、人々の思惑いかにかわからず、あわれにもせい一杯車掌という仕事に精励せずにはおられなかったのである。せい一杯

だ。このようにせい一杯の仕事を長くつづけることは、どんなに困難なことが察してもらいたい。しかし私は、多少のおかしさを感じながらも、このような自分を楽々とつづけることが出来たのである。そして私にそう出来たのは、勤務が終わって下宿への帰りに飲む焼酎のおかげだということが出来よう。

その店は、乗務員のつけれの利く貧弱な店で、ラムネから餅菓子までおいてあるだけでなく、簡単な御飯物も出来た。私は、そこで焼酎を飲んだのだが、その飲み方も、度をすごしたことのないしく真面目なものだった。だが、その焼酎を飲んでるとき、私の心に痛切にうかんで来るのは、美しい女への思いだった。このようなおかしな自分から救い出してくれる美しい女だった。しかし私は、私の美しい女が、どんな顔をしどんな姿をしているのか、さっぱりわからなかったのである。ただ、美しい女への思いがうかぶと、私の心のなかに、何か眩しい光と力にみだされることだけは事実だった。いわば美しい女というのは、まるで眩しい光と力そのもののような工合だったのである。

繰り返しているが、私は、まことに単純な人間なのである。世の夢想家といわれるような高尚な人種ではなく、ひどく現実的な男であり、そしてひどく現実的な労働者なのである。私は切符の精算のとき、切符とあわせて、売り上げの現金があまったり足らなかつたりするようなことはほとんどないのだ。また、あの車内に規則としてかかげることになっている運転手と車掌の名札は、車掌の責任なのだが、車の交代のとき、もって降りるのを忘れて、あわてて次の駅へ電話をかけ、上りの電車で送り返してもらおうという、車掌のよくやるへまをしかしたこともない。私は、万事きちんとしていることが好きで、また万事きちんとしてくるのが出来るのだ。だが、このような現実的な男が、滑稽にも、眩しい光と力としてしか思いうかばない美しい女を、痛切に欲しがっていたのである。そのとき、あの倉林きみという私娼が、思いうかんでいたのではない。第一、あの女は、美しい女の

意味するものと、正反對の女であつたからである。

私のおかしな真面目さは、仲間から多少輕蔑され呆れられてもいたが、私と仲間との間に決定的な溝をつくるものではなかつた。むしろ私は、概して仲間とはうまく行つてゐたと斷言してはばからない。仲間の間には、仕事上のつまらないことから、ひどく感情的になり、たがいに生まれない前から仇敵であつたように憎み合つてゐるものもいた。だが、私に対しては、どんな行きちがいが起つても、ほんとうに腹を立てる者もほんとうに憎むものもいなかったからだ。私のおかしさに腹を立てている者がいることはいたが、同じ私のおかしさが、彼の腹立ちをゆるめているようだった。同期生の原田に恋人がいた。染物屋の娘なのに色が白いと評判だった。その娘が、ある日ひとりで私の車に乗つて来たのである。私は、彼女が原田の恋人であるというところで彼女に十分好意をもつていた。だが、私は彼女へ切符を請求したのである。残念ながら笑いがらだ。彼女は、最初私の笑いに応じて笑つていた。だが私が彼女の前にいつまでも立ちつづけているので、彼女は次第に困つた顔になつて行つた。やがていらだたしい暗い顔になつたかと思ふと帯の間から手製の小さな財布を出すと、なかから十銭白銅を出した。私は、急に神妙な氣持になつて、一区の切符へパンチを入れた。私は、車掌台に帰りながら、どうして彼女は、原田の恋人だからだでのせて、といわなかったのだらう、とむつとした顔をしてゐる彼女を想像して、あわれに思つた。だが、原田は、このことを彼女に訴えられたらしく、翌日、私へいかつて云つた。

「お前、どうしておれの彼女に恥をかかせたんや」

私は、むつとしてゐた彼女の顔を思い出して、思わずふき出した。

「どうしてって、規則やもん、仕様があらへん」

原田は、私の笑いにたじろいだように、ぼそぼそ云つた。

「ほんまにお前は、憎むに憎めない変なやつぢや。おれにはお前わからへん」

私は、彼に私のわからないのは当然であると思つた。何故なら私を

おかしくさせてゐるものが私のなかの何に由来するのか、私自身もさっぱりわからなかつたからである。

だが、このおかしさは、一つの力をもつてゐた。私に勤務をせ一杯真面目にやらせるのも、私に焼酎をのませて美しい女をほしがらせるのも、私に職場や仲間を好きにならせるのも、この力のせいだった。そしてこのおかしさは、私個人のものであるかぎり、私はもっと平和な生涯を送れたにちがひなかつた。

ところがある日だった。乗務を交代して詰所へ入つて行くと、そこにいた七、八人の乗務員たちが、私を見てどつと笑うのだった。私は、最初、何のことかわからなかつた。で仕方なく私も笑つて見せた。すると人々は、またどつと笑うのだった。それは好意のあるものでありながら、残念なことに、明らかに反感と輕蔑をふくんでいた。仲間が私に対して、こんなはつきりした態度を示したのははじめてだったので、私はとまどつた。すると運転手の佐鳥が、その人々の笑いにもかかわらず、ひとり神妙な顔つきをしながら、私の名を呼んで云つた。

「おい、木村、あれを見ろ、恥ずかしいことあらへんか」

それは隔日に詰所へ掲示される従業員に対する賞罰表で、賞は赤、罰は黒のカーボンの字で書かれるものだった。佐鳥に云われて見ると、なるほど情ないことが起つてゐた。私の賞が、三つもならんでゐるのである。「賞三十点 木村末男 乗客の整理良好なり」「賞二十点 木村末男 無賃乗車の制限規則に忠実なりと認む」その上にまだ「賞三十点 駅名称呼の態度大いによろし」——賞点が一つだけだつたら、これほど人々の笑いを招きもしなければ、これほど人々から反感や輕蔑を受けはしなかつたであらう。賞点が三つもならぶことは多すぎるのだ。異常なことなのだ。そこには賞罰の客観性を超えたものの、いわば会社の意志が感じられるのだ。私は、あわれな声で誰へとなく云つた。

「賞八十点とまとめてくれればええのにな」

だが、誰も答えなかった。賞八十点は、レールの破損を発見して電車の顛覆を防いだり、機敏な処置によって人命を救助したりするような異常な功績に対して与えられるものであったからだ。しかも一点は一銭であるから八十銭賞としてくれるのであり、それは私の労働時間の六時間分に該当するわけなのである。私は、落ちつきなく、ベンチへ腰を下ろした。そのとき、年中花柳病をやんでいる車掌が、私をいやらしそうに見ながら、しわがれた声で云った。

「あんまり張り切るなよ、え？」

私は、人々からあの使い捨てられた、おかしなしかしいやらしいゴミ製品であるかのように眺められ、観察されているのを感じた。すると私の心に、何か恐ろしげなものが忍び込んで来たのである。私は、情なくもふるえながら云った。

「何や、たかが八十銭やないか！」

「ふん、云ってやがらあ」と誰かが呟いた。

「おれは何も云ってへん！ たかが八十銭やと云ってるだけや」

「威張ってやがるなあ」と塙という運転手が云った。

その場に、私と親しくしている気のいい車掌の金子がいた。彼は、いまになって自分が困った立場におかれたのに気づいたらしく、臆病な声で云った。

「木村、お前、あんまり真面目すぎるんや」

「おれ、普通にやってるだけやぜ」

「でも、無理して乗務監督に認められようとしてるように見えるもん！」

私は、思わずいかつて云った。

「無理してんの、みんなの方やないか！ 会社の方が無理したかて、みんなも無理せんかてええやないか。おれはほんまに何も考えとらへんのや。おれはほんまに無邪気なんなんやで」

交代の車が来て、詰所を出て行く者もいた。そして十分とたたないうちに、詰所の人々は、新しく入れかわっていた。なかに、賞罰表に

気づいて、おう！ とおどろきの叫びをあげる者がいた。しかしその者も、すぐ不愉快さを感じて行く様子が手にとるようにわかった。誰かが金子と同じ言葉を云っているのが聞えた。

「木村は、真面目すぎるさかいなあ」

私はその声へ抗議するように云った。

「会社が勝手にしたんや。おれはただ電車が好きなだけなんや*」

人々は、あわれむように笑った。その笑いは私の言葉を少しも信じていないものだった。みんな、何か誤解している、と私はみじめな心で考えた。しかしまた、残念ながら、誤解されても仕方のない気もしていたのである。

というのは、会社は、人員の不足を労働の強化で補おうとして、公休出勤や残業などの命令をやたらに出した。早出勤の者には、残業は逃れることの出来ない宿命のようにさえなっていたのである。そのためにも女房に逃げられる者も出て来る始末で、人々は、今月はどうしても稼がなくてはならないという理由がないかぎり、そのような命令を理由をかまえて回避した。だから出勤係は、出勤表の作製が頭痛のたねで、ときには残業してもらうために、乗務員へ哀願しなければならぬことが始終起った。だが私は、出勤表に実に従順であつただけでなく、出勤係から頼まれていやと云ったことはなかった。当然、私は、出勤係のお氣に入りとなり、当然月末に発表される月収高は、古参を凌いではおか上位にあつた。だが、私は意志してそうだったのである。私のおかしさの思わぬ結果なのだ。母の死後、兄姉はばらばらになり、私は私で独立して、だから私は、自分の口を養うことさえ出来ればよかったからだ。

さらに私は、ここではつきりさせておきたい。私は、監督から認められようと思ったことは一度もなく、ただ満二十歳になったら運転手になりたいと思ひ、また運転手になりたいと思つてゐる自分、いささかの悲哀をもつてだが、喜んでゐる人間だったということである。私の喜びに対するこのいささかの悲哀という保留は、もちろん私の美

しい女に關している。私のほんとうに欲しているものは、運転手ではなく、あの美しい女であつたからだ。私から、あの妙なおかしげな影を吹きはらい、私の心に熱と充実をもたらず、眩しい光である美しい女であつたからだ。私に十分な生きる意味をあたえ、しかもその十分さを十分に生きさせてくれる美しい女をこそ求めていたのだ。

もちろん私は、このような自分におかしさを感じる。だからこそ、私は、運転手になりたいと思つている自分を許して喜ぶことも出来たのである。

だが、交代して電車に乗つても、私は憂鬱^{ゆううつ}だつた。そのころのこの私鉄は、いまのような立派な三輛^{さんりやう}連結の鋼鉄車ではなく、バツテラという木製の單車で、運転台や車掌台が風に吹きさらしになる古い型のものだつた。私は、尻をびよびよんはねあげて馬のように走つて行く三号車に乗り組みながら、人々からこんな誤解を生むのは、私があまり單純な人間であるせいなのだろうか、と考えた。だが、この私の深刻な反省も、情ないことに五分もつづかなかつた。この私鉄は、ほとんど瀬戸内海の海岸線を走っているのだといわんばかりの真剣そだ。静かな波は、深い思いを抱いているのだといわんばかりの真剣そだ。顔つきで、ゆるく持ち上つて来ては、几帳面な規則正しきで砂浜へくだけていた。そのたびに規則正しくざわあと云つた。流木に乗っている鷗^{かも}は、何故おれの大地はこんなにもよく揺れるのだらうと、げげんきよんとした顔で、あらぬ方を眺めていた。浜の松は、それぞれ、ある強情さを示しながら、奇妙な踊りの型を固持しつづけていた。私は、振り落されないように後手にハンドブレーキを持ちながら、このおかしい自然になんといゆるめを感じていた。すると詰所で真剣に腹を立てていた自分が、笑うべき姿で思ひうかんできた。私は、何でもなかつたのだ、と思つた。賞金も、会社の私に對する悪ふざけとして素直にもらえないのだ、と考えた。何故ならあんな賞金をもらうのがおかしいとしたら、もらわないのも仲間の誤解に同ずるようでおかしかったからである。

だが、腹立たしいことに、会社は私に對する誤解をさらに客觀的に実証するといふことをしでかしてしまつたのである。

会社に^{あひだ}曙会という唯一の従業員組合があつた。ある一部の人々からは、御用組合だとかげで論難されていたが、それも理由のあることで、その組合の役員は、会社側から任命されていたからである。その役員に、そのときまだ入社以來一年もたない新參の私が任命されてしまつたのだ。私は、詰所に貼り出されたその辞令を見たとき、何か妙な氣がした。そしてほんとに妙だと思つたのである。それはもはや悪ふざけとしてすまじ得るものでなかつたからだ。その私は、自分の背中に向けられてゐる仲間のうろんな視線を感じた。そして私は、その人々の心に同感だつたのである。その辞令は、出勤係の部屋のガラス戸に貼りつけてあつた。出勤係は、そのガラス越しに勤務の終つた私を見つ、勢いよく部屋を出て来て、にこにこしながら私へ云つた。

「さあ、運輸課長のところへ行こう」

運輸課は、詰所の車庫線を越えた向い側にあつた。課長の部屋は、その隅の一室だつた。私が、入つて行くと小柄な威勢のよい課長は、機嫌^{きげん}のいい声で云つた。

「おう、木村か」

「今度、えらばれて曙会の役員になりましたから、挨拶^{あいさつ}に来ました」と出勤係が云つた。

「おう、それは御苦勞さん」と課長は私を見ながら答えた。人形のようにだまつて、突つ立っていただけの私は、あわてて云つた。

「私は、辞退したいんです、役員を」

「どうしてだい？」と今度は出勤係があわてた。

「私は、会社の方で考えられているような人間やおまへんねん」と私は力をこめて云つた。「私は、ごくつまらない人間で、つまらないことの好きな男でんねん」

「それでいいじゃないか」と課長は不審そうな声で云った。「どうしてわるいんだ」

「わるいというわけではないんですが」

「そうだろ」と課長は愉快そうに笑った。「まあ、しつかりやつてくれたまえ」

「でも、ほんまに私は役員に向かないんでー」

瞬間、課長はだまって私を見つめた。それからうす笑いをうかべながら云った。

「君を曙会の役員としたのは、会社の新しい方針として決定したことなんだぜ。しかしこの決定をくつがえそうと思うなら、君にもむろんわけはないさ、会社をやめればいいんだからな」

私は、思わず頓狂な声を出した。

「そんなに重大なことなんですか」

「そうだよ、重大なことなんだよ」と課長は意味ありげに云った。

私は、詰所の近くに間借りしていた駄菓子屋の二階へ帰って来た。私は、落ち着かない気持だった。私は、救いを求めるように窓をひらいた。近くにゴム工場の高い大きな煙突が、にゅっと立っていて、その先端から頼りなげな煙を細々とたなびかせていた。そのとき私に、まるで彼女が私の美しい女であつたかのように、倉林きみの姿が思い浮かんで来たのだった。

私は、窓をしめると、有金全部を制服のポケットへ入れて表へ出た。その私の足は、私娼窟で有名な三宮に向っていた。

そのとき私は、滑稽にも、会社に対してだけでなく、私の仲間に対しても、真剣に腹を立てていたのだった。私には、彼らによって、自分の主権が侵害されたという風に感じられていたのである。

3

その後、私は、曙会の役員会にも出席した。勤務も、我ながら呆れるほどのなげやりな熱狂さや無関心を振舞って見せた。しかし一方暇

を見つけては、倉林きみのところへ通っていたのである。もちろん、きみが私の求める美しい女でないことは、最初の日にわかつていた。だがきみはやはりそのような状態にある私をひきつける何かを持っていたのである。

きみは、私より五つも年上だった。いつも身体を斜めにふるような歩き方をする気分の交代のはげしい女だった。私に対しては、ほとんどの場合、そうするのが自分の特権だといわんばかりの乱暴な取り扱い方をした。しかしきみのこんな乱暴さには、小さいときから馴れていた。というのは、彼女は、私が小学校の一年生のとき、同じ小学校の六年生だったからである。彼女は、そのときから小柄だったが、男の子のようで、私は木に上っている彼女から、小便をひっかけられたことさえあった。だが、その彼女は、小学校を卒業して、中学校の教頭の家へ子守りにやとわれて行ってから、ぐれはじめたようである。十五、六にもならないのに、共同便所という町の噂さえ立っていたくらいだった。その彼女に忠告するものがあると、彼女は、生意気にもこう答えたというのである。

「うち、どうせ不幸な女やもん、放つといとくなはれ」

そして、いままに梅毒になって鼻が欠けるぞ、といわれても、いままに悪い奴につかまってどこかへ売られてしまいうぞ、といわれても、平気な顔をしていたというのである。しかも不思議なことは、その町で人望のあつた教頭夫婦は、自分の家の子守りが最初の窃盗で警察へ検挙されるまでの二年の間、少しもそんな彼女にふしだらの気配さえも感ずることが出来なかったのだった。

「要領ええってあらへんのや」と彼女と関係のあつた農業機械屋の丁稚が憎々しげに私の姉に云った。「先生の家のもんには手つけへんし、おくさんにはうまいことおべっかつつかいやがるし、用事はちゃんちゃんとするし、あれやつたら誰でもだまされるわ」

私が、このきみが三宮にいるというのを知ったのは、この私鉄の運転手をしていた兄の倉林捨市へ、この私鉄へ入る伝手を求めて会い